

Title	初期アジア主義についての史的考察(6)第五章 東亜会と同文会
Author(s)	狭間, 直樹
Citation	東亜 (2002), 415: 67-73
Issue Date	2002-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/122331">http://hdl.handle.net/2433/122331</a>
Right	© 2002 霞山会
Type	Journal Article
Textversion	publisher

## 第五章 東亜会と同文会

狭間直樹

(京都大学名誉教授)

## 一、東亜会について

アジア主義団体として最も重要な東亜同文会が創立されたのは日清戦争後の一八九八年秋のことだが、それは、周知のように、東亜会と同文会が合併することによって出来たものだった。

東亜会が誕生したのは、日清戦争に前後してまきおこった対華政策論議の渦中からである。興亜会が維新後の精神的緊張のひとつの表現であり、東邦協会が立憲体制確立にともなう政治的高揚のある種の産物だったとすれば、東亜会は明らかに日清戦後における両国関係の新段階を刻印して生まれたアジア主義団体だったのである。

東邦協会誕生の中心人物の一人であった福

本誠が、東亜会の成立にも重要な役割をほしたとされる。すなわち、福本誠の渡欧送別会に三宅雪嶺、陸羯南、池辺吉太郎、帝大・早大の学生数十名があつまり、そこで話が出て井上雅二、香川悦次(怪庵)を幹事に準備をすすめることにし、三十一年春に江藤新作一派とも合同して成立の運びとなった、という<sup>(1)</sup>。酒田氏によれば、井上等のものと江藤等のものの合体を仲介したのは平岡浩太郎で、それは要するに、進歩系政治家と『日本』グループ、それに学生をくわえた組織なのであった<sup>(2)</sup>。

会の創立にかかわり、中心的な活動家であった井上雅二によれば、一八九八年春、日本橋借楽園で陸実、三宅雄二郎、犬養毅、平岡浩

太郎、江藤新作、香川悦次、井上雅二らが合し、以下のことを話し合ったという。

一、機関雑誌を発行し、江藤氏之を担当すること

一、時事問題を研究して所見を時々発表すること

一、横浜、神戸居留の支那人篤志家を入会せしむること

一、光緒帝を補佐して変法自疆<sup>てつ</sup>の局に当たる康有為、梁啓超の入会を許すこと<sup>(3)</sup>

これは会を創立するための趣旨としては、いかにもそぐわぬものである。第一条にいう、江藤新作が担当した機関誌『東亜細亜』が見されればよいのだが、目下のところ、その存在は確認されていない。第二条は、会の取り決めとしてさして意味があるとも思えぬものである。第三条は、日本の会として一つの重点の方針というにとどまる。第四条にいたっては、その口調にも違和感を感じるが、そもそも戊戌変法の開始は一八九八年六月のことなのだから、後の高みからの整理的叙述であることは明らかである。

後年の回想的文章には、多かれ少なかれ、そぎ落とされた部分もあれば補完的に埋め合わされた部分もある。その意味では第一次史料にくらべて、普通、正確性において劣るも

のである。しかし、時間のフィルターをへて整理された当事者の記憶は、かえって活動の眞の姿を描きだしているような場合も、まあるのである。この第三・四条も、結果的にそうなったことを、活動開始前の方針であるかに書いてしまったのだろう<sup>(4)</sup>。じっさい、井上は康梁一派の羅普や徐勳と親交があったし<sup>(5)</sup>、亡命してきた康有為・梁啓超の面倒をよくみた人物は東亜会にかかわるものが多く、とりわけ柏原文太郎ら学生グループ（早稲田系）の名前が目立っている。

徐勳（一八七三—一九四五）は、字を君勉といい、広東省三水県の人、康門万木草堂「十大弟子」にあげられ、康有為にもっとも忠誠をつくし「康氏の子路」とまで言われた人物だった。一八九七年、澳門で機関誌『知新報』の創刊にたずさわり、翌年六月以前に来日して横浜大同学校の経営に任じた。前述したように東邦協会の会員にもなっている。晩年は舌禍を恐れた子の徐良によって監禁されたため、気が狂って死んだとい<sup>(6)</sup>。

また羅普、字は孝高、は広東省順德県の人、万木草堂時代からの弟子。おそらく一八九七年に日本に留学し、東京高等専門学校（後の早稲田大学）留学生の第一号という。政変後に来日した梁啓超に日本語を手ほどきし、二

人で『和文漢読法』なる一書を編んで、一八九九年に刊行した<sup>(7)</sup>。

名前からも想像できるように、これは漢文訓読法の裏返しの応用したもののだが、この速成法はその簡便さが受けて大流行し、のちまで影響を残すことになる。それはともかく、以前には熱心に唱えられた「官話を共通語に」という主張は、このころにはもはや影を薄めたのであって、東アジアの言葉をめぐる環境は激変したのである。

『東亜細亜』と擬定された機関誌はおそらく刊行にいたらなかったのではないかと思われる。というのは、亡命してきた梁啓超が来日して最初に取り組んだ光緒帝救援の請願だったことは前述したが、その書簡は実は東亜会宛にも出されていた。「東亜会に寄せるの書」であるが、それは『日本人』誌上に掲載された<sup>(8)</sup>。

これには日付が省かれているが、東邦協会宛とおそらく同じの十月三十日付のものだろうから、書き上げたときには東亜会は存在していたが、直後の十一月二日に同文会と合併して東亜同文会になるのだから、たしかに東亜会の会名そのものは消えてなくなった。しかし会の実体は、東亜同文会との命名にも明らかのように、新しい組織のなかに再生されて

いるはずである。ところが、東亜同文会の機関誌『東亜時論』に載せられたのは、前述したように、東邦協会宛のものだった<sup>(9)</sup>。東亜同文会会頭近衛篤磨は東邦協会副会頭なので、近衛を軸に考えればそれでよいようでもあるが、東亜会宛のものが『日本人』に載せられたということは、やはり東亜会とくに『日本』『日本人』グループと、同文会系統の間に若干のズレがあったのではないかと思われるのである。

前掲の四条は井上雅二の『興亜一路』に拠ったものだが、東亜会については、日本側に資料が残されていないようで、のちの『東亜同文会史』も出典を明記することなく、同じものを引いている<sup>(10)</sup>。

しかし、東亜会に関しては、中国側の『湘報』<sup>(11)</sup>に資料が残されている。「東亜会簡明章程 即興亜義会」がそれである。『湘報』は湖南変法派が刊行した日刊紙、唐才常が「序」を、譚嗣同が「後序」を書いている。「義会」は日本語、当時にはよく使われたが、中国には定着しなかったようである。『漢語大詞典』にも項目がない。「興亜義会」は東亜会の性格の説明であるとともに、四字句にしてのその別名の意味も持たされているようだ。この資料を最初に指摘して東亜会と戊戌の変

法維新との関係を考察されたのは、藤谷浩悦氏である<sup>(12)</sup>。

章程は全十條、四力條を抜き出しておこう。

第一条 本会は東亜会と定名する。

第二条 本会の宗旨は専ら東亜の振興を講究することを以て主と爲し、その実行を図る。

第四条 本会の会所は日本東京に設け、董事二人を立てて会事を弁理し、并に支邦上海に一分会を設けて以て相い応ず。

第六条 本会は毎月雑誌一部を發刊し、名づけて『東亜細亜』と曰う。

省略したのは、入会方法、例会、会費などのことである。これは会の章程として首尾のととのったものであって、第十条のあとには「明治三十一年四月 幹事 井上雅二 香川悦次」と年月署名まである<sup>(13)</sup>。これをもとに、東亜会の創立を一八九八年四月と確定したのは、藤谷氏の貢献である。

会員としては、陸実、福本誠、神鞭知常、犬養毅、末永節、原口聞一、平山周、徐勳、羅孝高（羅普）、内田良平、頭山滿ら、相当の顔ぶれをつらねた三十二名の名があがっている<sup>(14)</sup>。しかしそこには、江藤新作や佐藤宏、宮崎滔天の名は見えないから、かれらは会の

創立時には会員ではなかったのである。江藤が編集担当との井上雅二の記述は、これまた後の任務分担だったことが分かる。かりに江藤が五月に入会して、章程第六条という会誌『東亜細亜』創刊に取りかかったとすれば、東亜同文会への移行まで約半年あるのだから、何号かは出せる時間があったはずである。

唐才常の「興亜義会を論ず」なる文章は東亜会にたいする彼の評価を明らかにしている<sup>(15)</sup>。唐才常（一八六七—一九〇〇）は湖南省瀏陽県の人、譚嗣同とともに「瀏陽二傑」を称された。巡撫陳宝箴の庇護のもとに湖南の変法運動をすすめる、『湘報』の「主編」を担当した。のち、上海に出て『亞東時報』の編集にたずさわり、一九〇〇年に自立軍蜂起を画策、未発の内に捕縛、処刑された（八月二十二日<sup>(16)</sup>）。

唐才常に東亜会についての情報を与えたのは、横浜の大同学校校長、東亜会の発足当初からの会員の徐勳である。徐勳は、「日本の処士は、仁矣、侠矣」と絶賛してこういう<sup>(17)</sup>。日本の在野志士が中国の滅亡は黄色人種の衰頹であり、黄色人種の衰頹は日本の危険であるとして、救世の志を持つ者が集まって興亜義会を創った、それは黄種を盛りたて東亜を守りロシア、ドイツなどの侵略を防ごうとす

るものなのだ、と。清末において、ロシアの侵略性にたいする人々の警戒心は一貫しているのだが、ここでは前年末の膠州湾奪取（租借に名を借りた割讓）により、ドイツも侵略国として挙げられているのである。

その際、徐勳の云うところで注意を引くのは、中国革新の担い手として、湖南省を高く評価していることである。唐才常に手紙を書いているのだから、それは或る意味で当然のことだが、くわえて唐はわざわざ、雑誌『日本人』の誌名をあげて、「湖南党」「康工部門下」が高く評価され、世界中から「支那を振るわすものはただ湖南のみ、士民勃々として生氣あり、俠なるべく、仁なるべきはただ湖南のみ」と見られている、とまでいう<sup>(18)</sup>。ここでいう「湖南党」とは、開明派巡撫陳宝箴のもとで南学会を組織して改革をすすめた唐才常ら、湖南の変法派のことである。

唐才常は、もし湖南が外人の期待に応えず、興亜の精神に背を向けるなら、中国はダメになるだろうと言って、当面の対策十條を提議する。第一条は南学会が人を派遣して興亜の会務を修得させること、第二条が分会の設立、だから、東亜会との提携が発点となっており、第九条で『湘報』と日本側機関誌の相互頒布をいう。他は、時務学堂等への日本人教

習招聘、考察人員の派遣、憲法等書籍の翻訳、日本人・南洋華僑による鉱山採掘と工場建設、横浜大同学校への留学生派遣など、いずれも「開放・改革」の清末版である。ただ、横浜・神戸の華僑による「孔子教堂」の建設（第八条）だけは、康有為派の方案であることをよく示している。

この文章で唐才常がキューバ問題を引き出し、「かのキューバのスペインにおける、アメリカ人すらなお座視するに忍びずして、出でてこれを図る。況や吾は日本と唇齒の盟を聯ぬ、力を併せて維持せざるもの有らんや？」というのをみれば、唐才常の考えていたものがモンロー主義の東アジア版であったことが分かる。しかし注意されるべきは、この例そのものが、先に引いた『日本人』の佐藤宏の文章に拠ったものだったことである。

佐藤はその文章でこういう。「諸君夫のキューバ独立の挙を見ずや、米国の志士仁人は其孤弱を憫み、……甚しきは国籍を脱し、革命に身を投じて彼等のために犬馬の勞を尽くせし事を。東方の桜花国の人民よ、公等は之に對して遜色なきか」と。つまり、日本の志士にアメリカ独立におけるラファイエット、ギリシャ独立におけるバイロンの役割を演ぜよと叱咤しているのである。

## 二、同文会について

同文会は東亜会にやや遅れて一八九八年六月、まさに北京の朝廷で変法維新が開始されたときに発足した。酒田氏によれば、荒尾精門下の「大陸浪人」と近衛篤磨および近衛の経営する精神社系が合作したものであった。会の「主旨」はこうである。

時局の変遷は、日清間の問題に研究を要する事一日より多からしむ。而も其必要に應ずるの機閑なきを憾む。是吾人同文会を創立して、実地の問題の研究を為し、以て此必要に應せんとする所なり。本会は政党以外に立ちて、専ら彼我人士の情意を疎通し、商工業の發達を助成するを以て目的とす。

この「主旨」の重点が、「彼我人士の情意を疎通」することによる、「商工業の發達」の助成におかれていることは明白である。わざわざ、政党外に立ち、と言っているのは、近衛を立てることにより、政党と結びついた利権の外に活躍の場を求めようとするのであろうか。

近衛篤磨をこの方面の仕事に担ぎ出したのは、政派的な関係の薄いお公家さんと考え

これを書いた後、唐才常は湖南をはなれ、日本に来たときには犬養毅や宮崎滔天らに会っている。翌九九年には『亜東時報』に七篇の文章を発表した。『亜東時報』は在上海の日本人の団体、乙未会が一八九八年六月に上海で創刊した月刊誌（のち半月刊）であって、当初は山根虎之助（立庵）が編集し、第六号（一八九九年二月）からは唐才常が編集を担当した。乙未会は白岩龍平、宗方小太郎が中心となっていた組織で、上海同文会の基礎となった組織である。山田良政、川島浪速らもメンバーであった。

「日本人は実心に保華するの論」はアジア主義的視点からはきわめて注目すべき文章である。それは、日本人の「支那保植」が欧米とはちがうものであることを、力説したものである。「支那を保植する」には人材育成が第一で、育成には「西国文明の政学」を脳味噌にたたき込まねばならない。イギリスは香港に大学堂を創ったが、商売用の人材を育てるだけで、「上を安んじ下を全うし隣に交わり民を治めるの具」である「政事、律令、倫理、格致」といった「政学の大端」をけつて教えてくれない。それにたいし、日本の志士は「政治学・経済学・哲学・社会学」を懸命に教えてくれる。「これすなわち天の

た犬養毅の策との説がある。もちろん、そのような外部からの力もはたらいただろうが、ドイツ留学から帰った近衛は、人種問題に興味をもち、「同人種同盟 附支那問題の研究の必要」を公表して、言論界の注目を浴びていた。「東洋の前途は、終に人種競争の舞台を免かれじ。……最後の運命は、黄白両人種の競争にして、此競争の下には、支那人も、日本人も、共に白人種の仇敵として認めらるるの地位に立たむ」との見解のなかには、やはり、日中の連携による欧米への対抗が強くのこったのである。

それはともあれ、近衛をかついだ組織の結成を準備したのは、岸田吟香、宗方小太郎、井手三郎、中西正樹、中野二郎、高橋謙、田鍋安之助、山内岳、中島真雄、白岩龍平ら、いずれも清国の地で薬局・新聞・汽船などの事業にたずさわっていた面々である。

近衛篤磨に説いたのは中西正樹・井手三郎と白岩龍平・大内暢三（近衛の秘書）で、主旨を了承した近衛は、六月十四日、彼らに規約書の起草を命じた。近衛家文書中の「明治三十一年か」と註を付された、白岩龍平筆「同文会設立趣旨書」はおそらくその時に起草された文書の一部である。

同上趣旨書は、まず当然のことながら、会

將に両国合邦を來すの局にして、欧勢東漸を杜ぐの一大関樞を成す所以なり。去年の變法で皇上が大小學堂を創ろうとされると、ハートが阻んだ。日本人はすでに百里の道の「八十九里」は歩んでおり、中国人が途中から共に進む利は多い。日本人が華人のために立てた学制を英米人のそれと比べれば、誠と偽、実と虚の違いが分かるう、と。

これは、ほとんど無条件の信頼である。くわえて、構想は提携を越えて「合邦」にまで突き進んでいる。あるいは樽井藤吉の影響があるのかもしれないが、はっきりしたことは今のところ分からない。

西洋は公法（国際法）を振りかざすが、東洋には「野蛮」の政策で立ち向かってきており、中国は滅亡の淵に望んでいる。そのような情勢を背景に、日本を頼りにして立ち向かう道が模索された。そして東亜会はまぎれもなく、その道を進むための提携を実現する一つの組織と考えられたのである。日本への依頼心の天真爛漫な表明は、のちの歴史の展開に照らすと不思議といつてよいほどのもののだが、日清戦争から義和団にいたるこの時期は、つかの間の、幸せな共有幻想の時代だったのである。

名について述べる。ついで、会の性格をきわめて簡単に、支那問題の研究・実行・調査に従事する、と規定する。そして、本会の事業すなわち、「一、上海に同文会館を設け、両国有志の協同を図る事」等の七項をあげる。これらが『時論』に掲載された、以下の「同文会綱目」五カ条となったのであろう。

- 一、本会は同文会と称し、会館を赤坂溜池町六番地に設く。
- 一、本会は支那問題を研究すると共に、各般の調査に従事し、各種事業の助成を計る。

- 一、本会は上海に同文会館を設け、日清両国有志の教導を図る。
- 一、本会は東京に在ては『時論』、支那に在ては『亜東時報』の両報を以て通信機関とす。

一、本会は上海に於る同文学堂を以て両国人の教育機関とす。

見られるとおり、相当に会則らしいものになっている。文中にみえる機構と媒体は、『時論』が東京で刊行されている雑誌である以外、同文会館、『亜東時報』、同文学堂のいずれも、みな上海ですでに機能しているものだった。それらは酒田氏によれば「乙未会関係事業であった」とのことである。

なお、上引の趣旨書で興味を惹かれるのは、「既設の事業」として、「学堂は上海に日清英語学堂あり、東京に善隣書院あり」にはじまり、漢字新聞・実業・『亜東時報』についてとくに言及していること、および「現に在清の同志者」として「漢報館 宗方小太郎」以下、「民間事業に従事せる」二十八名の一覧が掲げられていることである<sup>90</sup>。ちなみに『亜東時報』は「上海に於て日漢両文の週刊雑誌にて本月より発行す」とある。同報の創刊は一八九八年六月のことだから<sup>91</sup>、白岩の趣旨書作成は六月と決められそうだが、ここで言われているのはちがいが、週刊ではなく月刊誌として刊行されたことからして、あるいはもう少し早かったのかもしれない。これを要するに同文会は、大陸での活動を基礎にして関係者が日本内地の側に働きかけたものという点で、既述の諸組織とはいわば逆のベクトルをもって動きはじめたものであった。それだけ、在華邦人の力量の蓄積が見られたわけである。これも、アジア主義が機能する「場」が従前とは根柢的に変化しつつあることをしめす重要な兆候だったのである。

注

(1) 東亜同文会編『対支回顧録』下巻、原書房

一九六八年復刻版、八百七十五頁。なお、同書は明治三十(一八九七)年春に成立とするが、福本誠の渡清(渡欧のための)は一八九八年三月のことである。  
 (2) 酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』東京大学出版会、一九七八年、百十頁。康有為の万木草堂へ田野橋次を送り込んだのも平岡浩太郎であった(上村希美雄『宮崎兄弟伝』アジア篇上、百五十頁)。  
 (3) 井上雅二『興亜一路』刀光書院、一九三九年、前注酒田氏書所引。  
 (4) 酒田氏は、東亜会の趣旨が「日清両国の経済関係を密ならしめ、その基礎を強固にし、将来益々之れが発展拡張を期する為め、先づ特殊なる教育機関と通信機関を設けるに於た」との史料(『東亜先覚志士記伝』上巻、原書房、一九六六年復刻版、六百八頁)を提示し、「活動の詳細はわからない」とされる(同上、百十一頁)。これは趣旨といえるものだが、けっして会の活動の全体を覆うものではないだろう。  
 (5) 酒田氏前掲書、百十二頁・百三十一頁。  
 (6) 陳漢才編著『康門弟子述略』広東高等教育出版社、一九九一年、十八、二十四頁。陳漢才は、政変後康有為に従って来日したとするが、政変以前の来日であって康を迎える側だったことは、前月号七十五頁注二十四参照。

(7) 同上、百三十八頁。これは梁啓超の訳とされている「佳人奇遇」を羅普の訳と明記する。また、蔣貴麟「康南海先生弟子考略」『大陸雜誌』第六十一卷第三期。両書とも、政変後の来日とするが、誤り。「和文漢読法」については、京都大学所蔵鈴木彪軒先生手沢本以外にも存在が確認されているので、別に考察をくわえたい。  
 (8) 梁啓超「論中国政変(寄東亜会書)」「日本人」第八十号、一八九八年十二月五日。  
 (9) 梁啓超「上副島近衛両公書」『東亜時論』第一号。前号、第四章「東邦協会について」注<sup>24</sup>。  
 (10) 東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、一九八七年、三十頁。第四条の不適切を言わぬことは同じ。  
 (11) 『湘報』は、戊戌百日変法の全時期をおおって、第一号(一八九八年三月七日)から第七十七号(同十月十五日)までが現存する(中華書局、一九六五年影印本)。  
 (12) 藤谷浩悦「戊戌変法と東亜会」『史峯』第二号、一九八九年。  
 (13) 「東亜会簡明章程 即興亜義会」『湘報』第六十五号、一八九八年五月二十日。なお、『湘報類纂』(台湾 大通書局、一九六八年影印本)所収は年月署名を缺く。  
 (14) 「統登東亜会會員姓名」『湘報』第六十六号、一八九八年五月二十一日。姓名に誤植がき

わめて多いが、単純なミス。藤谷論文では正されている。

- (15) 唐才常「論興亜義会」『湘報』第六十五号(『唐才常集』中華書局、一九八〇年、所収)。
- (16) 湯志鈞『戊戌時期的学会和報刊』台湾商務印書館、一九九三年、二百六十五頁。
- (17) 徐勤の唐才常宛書翰は「論興亜義会」中の引用による。
- (18) 下敷きの文章の1は、佐藤宏「支那朝鮮の真相を説きて同国を改造するは日本人の責なる所以を論ず」(『日本人』第六十三号、一八九八年三月二十日)である。
- (19) 米西戦争の開始、アメリカのスペインにたいする宣戦布告は一八九八年四月十九日であるが、一八九六年の大統領選挙で、キューバ独立を公約したマッキンリーが勝利したため緊張が高まった。九八年二月には開戦必至の状況が生まれていたのであって、佐藤の文章はその時代状況を踏まえて書かれたものなのである。
- (20) 陳善偉『唐才常年譜長編』上下、香港中文大学出版社、一九九〇年、五百七十二・五百五十四頁。
- (21) 中村義『白岩龍平日記』研文出版、一九九九年、百四十四頁。
- (22) 唐才常「日人実心保華論」『亜東時報』第十七号、一八九九年十一月。
- (23) 酒田正敏『近代日本における対外硬の研究』東京大学出版会、一九七八年、百十四頁。
- (24) 「主旨」『時論』第七号、一八九八年六月二十五日(酒田正敏前掲書、百十八頁所引)。
- (25) 木堂先生伝記刊行会編『犬養木堂伝』原書房、一九六八年復刻本、七百十五頁。
- (26) 近衛篤磨「同人種同盟 附支那問題の研究の必要」『太陽』第四卷第一号、一八九八年一月。
- (27) 『東亜同文会史』霞山会、一九八八年、三十頁。
- (28) 『近衛篤磨日記』付属文書、鹿島研究所出版会、一九六九年、四百一頁。
- (29) 「同文会綱目」『時論』第七号(酒田氏前掲書、百十八頁所引)。
- (30) ジャーナリズムは宗方のほかに、『亜東時報』の山根虎之助、『閩報』の井手三郎(素行)がいるが、教員・洋行社員がメンバーのほとんどを占める。内、成田康輝は「西藏探検中」、小越平陸は「吉林探検中」である。
- (31) 『亜東時報』創刊号、一八九八年六月二十五日(月刊)。

# 霞山会館

千代田区霞が関3-2-4 霞山ビル9階  
TEL 03-3581-4671~3

地階/レストラン 花山(洋食・和食)  
1階/珈琲茶房 サントス  
大手町店/レストラン 花山  
(サンケイ新聞前・通信総合博物館地階)